

第3回 栗東市観光振興会議 会議概要

■日時：令和6年12月16日 午後3時00分～午後4時45分

■場所：栗東市危機管理センター2階 防災研修室

■出席：《委員》

築地 達郎委員（会長）、田中 由美委員（副会長）、岡山 光雄委員、三木 茂委員、
林 優里委員、濱田 康之委員、鶴田 泰伸委員、高野 秀樹委員、北川寛人委員

《オブザーバー・運営組織》

一般社団法人栗東市観光協会 山口事務局長

《委託事業者》

(株)しがぎん経済文化センター

《事務局》

商工観光労政係長、商工観光労政課事務局担当

■欠席：なし

1. 開会

（商工観光労政係長）

2. 市民憲章唱和

3. あいさつ

（築地会長あいさつ 省略）

（事務局）

- ・本会議内容は原則公開。
- ・本日の傍聴者は0名。

4. 報告事項

（1）第二期栗東市観光振興ビジョン策定に向けたスケジュールについて（資料1）

○事務局説明（省略）…資料に基づいて説明

【おもな意見交換】

とくになし

5. 協議事項

(1) 第一期栗東市観光振興ビジョンの最終評価（案）について（資料2）

○事務局説明（省略）…資料に基づいて説明

【おもな意見交換】

委員：資料2の表面、「観光資源の魅力向上」の最終評価（案）について、「体験型需要の高まり」という表現と、その後「入込客数の上位施設は道の駅」という表現があるが、道の駅に関してはおそらく買い物が主体だと思う。この体験型の需要が高まっているという評価はどこから来るものなのか。

事務局：観光客ニーズ調査をした中の結果の一つとして、観光客の旅行全体に対する意識の変化というところで、コロナ禍を踏まえ、アウトドアを重視や体験型を重視にシフトしつつあるという結果だった。前回会議の中の資料2でお示したところから、このように文章で作成した。

会長：今の説明を一言加えておいたほうがいい。この資料2は（案）が取れて最終評価になるので、この資料を見ただけで理解できるようにしておく必要がある。実感値とずれはないだろうか。

委員：正直綺麗すぎると思う。実際、観光消費額や入込客数は道の駅が主体であるということを下で書いている。つまり、買い物に来ている人が多いのであって、本当に観光客が増えているのかどうか、ちゃんと冷静に判断しないといけない。基本方針Iの根拠になるのは下部に記載の表だけなので、令和2年と比べていいかわからないが、どの項目も比較対象がない。本当に需要が高まっているのか。もちろんフォレストアドベンチャーは増えていると思うが、その入込客数や消費額が実際は何%に当たるのか。以前も依頼したが、入込客数の上位ランクは出せないのか。入込客数100万人のうち、どこが一番多かったのかという数字がないので、余計これが最終評価として見えないのではないか。

委員：県では国から委託を受けた観光入込客統計調査を実施しており、歴史文化や寺社、スポーツなどのテーマに分けて集計をしている。そのテーマごとに栗東市のデータを集計・比較すれば、体験型が増えたかどうか、市の中でどの分野が伸びているのか確認できるのではないか。

会長：事務局に確認だが、この最終評価（案）を確定するタイミングはいつか。スケジュール的には第一期の評価が終わらないと第二期が作れないという構造のよ

うだが、第二期もパブリックコメントなど策定までに必要な過程があるので、ひとまず仮説として第一期の振り返りをしておくということでも問題はないと思うが、事務局としてはどうか。

事務局：新しいスケジュールで考えると、本日、第一期ビジョンの最終評価を固めたいと思っている。

会長：そうすると、「最終評価の根拠があいまいではないか」という今のご指摘については同感だ。それから、重み付けで言うと、最終評価（案）の三つのポイントのうち2番目の「道の駅が上位施設であってこれが観光の玄関口として活用できる」という文章は、「活用できる可能性がある」と修正した上で、これを1番目にする。そして3番目の「馬を活かしたまちづくり」を2番目にする。最後に、1番目を3番目にして、「体験型観光への社会的な需要の高まりと、本市のコンテンツがマッチすれば、自然環境を生かした体験型観光の誘客効果が期待できる」という表現にしてはどうだろうか。委員の皆さんに対して提案したい。

委員：「体験型観光への需要～」というところは、基本方針Ⅰではなく基本方針Ⅱではないかと感じた。既存のコンテンツというより、第一期ビジョンを通して観光協会などで作ってきた体験型コンテンツとかは需要があるのではないかな。データや根拠は整理する必要があると思うが、そういう体系づくりが結果に結びついていたのではないかな。

会長：おっしゃる通りと思う。なぜかという、資料2の「前回会議における意見概要」で、「通過型」と「馬のまち」という二つが挙がっていて、それに対して最終評価（案）は三つのポイントになっている時点で、既に齟齬が生じていることが今の指摘でわかった。ついては、体験型については、私が先ほど申し上げた提案内容を資料2の基本方針Ⅱに対応する最終評価（案）に持っていくという修正提案をさせていただきたいが、いかがだろうか。

委員：私は体験事業をやっているのですが、こうして文章に入ることにはありがたいが、改めて資料2の具体施策の一覧表を見ると体験に関する事業がないので、最終評価のコメントはかなり唐突な気がする。また当時、栗東市で調査した「観光魅力度アンケート」のようなものがあつたと思うが、当社は入っていなかったもので、現在と当時を比較する材料がそもそもない状態だと思う。

会長：ちょっと整理したい。これはあくまで第一期を振り返っての最終評価だが、体験型を前面に打ち出すということを5年前は考えていなかったと思う。むしろ金勝地域の自然資源や文化的資源を押し出そうという考え方が強かった。そもそも前回の会議で体験型の議論はあっただろうか。

事務局：その議論はあまり出ていない。

会長：そうするとやはり、体験型の記述はやや唐突な印象。では、資料2の最終評価（案）の1番目3行分をすべて削ってはどうか。最終的に調整することは可能だと思うので、一旦削った上で、第二期ビジョンの議論を先に進めながら、必要に応じて第一期の最終評価の方に戻ってくるというやり方でいきたいと思う。

委員：同様の点について、資料2の基本方針Ⅱの最終評価（案）で「県内外の物産展に積極的に出展を行い」とあるが、下部の指標の達成状況では一切出てきていないので、これも唐突だと思う。下の指標の達成状況に基づいて最終評価をすべきだと思うが、達成状況とコメントがマッチしていない。土産物についても、第二期を考えるために実施したアンケート結果として出てきた内容であって、先ほどの体験型と同じではないか。あくまでも第一期ビジョンの評価をするにあたっては、ロードマップが具体的にできたのかできてないのか、できなかったなら理由な何か、あるいは実際はやらなくてもよかったんだ、というような評価をすべきではないのか。

会長：他に齟齬がありそうなところはないだろうか。

委員：おそらく全般的に齟齬があると思う。前回会議でもアンケート結果のことが頭にあったので、第二期ビジョンをつくるにあたって土産物や入込客数の話になって、前回会議のときの意見概要の欄も第一期ビジョンを評価した内容にはなっていなかった。根本的に評価のやり方が違うような気がする。前回もこの資料を見ておいて、今回こういう意見を出すのは失礼だと思うが…。指標の達成状況が実際にどう達成されているかも書いていない。令和6年度にどうなっていないといけなかったのかわからないので、実績と前年との差は書いてあるが、本当は目標数値が書いてあったのではないか。

会長：今の指摘で私も気づいたが、資料2の作り方自体に問題がありそうだ。左側の前回会議での意見概要を手がかりにして最終評価をするという構成になっているため、そもそも最終評価が何に対する評価なのかということが見えない状態

に陥っていると思う。

これは一旦取り下げて改めて提案させていただこうと思う。

今日の会議を開催するにあたり、事前に事務局とは経済波及効果の整合性について集中的に議論したが、それ以外の文言についてはやや事務局任せにしすぎた。会長として申し訳なく思う。そういうことで会長の権限で、協議事項①の最終評価（案）については一旦取り下げて、改めて提案をさせていただきたい。やり方として、ここでは第一期ロードマップに対してどうだったのかという客観的な評価のみを記載するというところでどうだろうか。そのほうが後は議論しやすいと思う（委員の反応を確認）。では、そういう方向で最終評価の文言を改めて考えさせていただくので、よろしくお願いいたします。

（２）第二期栗東市観光振興ビジョンの素案について（資料３）

【おもな意見交換】

会長　：まず事務局からご提案いただく前に観光振興ビジョンの主体について確認をしておきたい。この観光振興ビジョンは誰が誰に対して示すものなのかということだが、事務局にも確認したところ、これは振興会議が栗東市に示す、つまりビジョンの策定主体はこの会議である。すなわち、我々が提示するビジョンを市役所においてどのように活用するのかについては、我々は関知しないというふうに確認をしたいと思う。

なぜこういうことを確認したいかというと、第一期ビジョンを作ったときもそのような考え方で進めたが、最終的に印刷物は栗東市が発行元となっており、栗東市が考えたことで、栗東市がやることになってしまっていた。結果、観光振興ビジョンの中で示されたいろいろなアイデアが行政の枠組みの中で生かされなかったと思っている。

そのため、我々のアイデアや考え方をまとめたものとして観光振興ビジョンを提示するということを、この会議体としてまず合意をしておきたい。

我々が示すビジョンをどう活用するかについては、当然、栗東市の側に選択権や活用自由がある。一方、作成作業をするのは事務局なので、我々の意見を踏まえてビジョンの素案を作っていただいている。事務局は二重人格にならざるを得ないところもあると思うが、よろしくお願いします。

事務局：最終的にビジョンを公表する際は「栗東市観光振興ビジョン」として出すものと思っているが、そういう形で進めて良いということだろうか。

会長　：この観光振興ビジョンの主語・主体は、観光振興会議であるので、それをきち

んと書いてほしい。それを書かずに栗東市がビジョンを作ったということになると、我々の手を離れたところで栗東市がビジョンに移り移ってる形になってしまうので困る、ということだ。第一期が結果そうってしまった。

市役所は最初に決めたことに縛られるので、その中でやれることをやったということになると思うが、観光振興ビジョンを発出する段階で観光振興会議が作ったものだということをきちんと書いてほしい。皆さんの意見はいかがだろうか。

委員：市役所の立場を考えると、市の考えとしてビジョンを出したいという思いではないか。この話は市の考えをはっきり言っていたかないと議論が前に進まないと思う。

事務局：観光振興ビジョンは、栗東市として観光振興を考えていくものとして、観光振興会議で議論いただいて、栗東市の名前で出すという形を考えている。

会長：そうすると我々は栗東市に対してどういう立場になるのか。

事務局：観光振興ビジョンの策定にあたり、栗東市役所の中だけではなく、市内の各企業・団体の方や専門家の方にご協力いただき、それぞれの立場での意見や指摘をいただきながら栗東市の観光振興ビジョンを策定する、また、策定後の進行政管理を一緒に見ていただくというものだと考えている。

会長：私たち委員に主体性はないと言っているように感じるが、それは困りますとお伝えしている。これが諮問会議であれば、質問された内容について妥当性を審議する役割なので主体性はないと思うが、この振興会議は諮問会議ではなく、振興ビジョンを案出するだけではなく、ちゃんと実効性のあるものとして構築されているということを我々自身が担保して、その実施を委ねるという立場だと思う。

委員：振興会議設置要綱（ビジョン素案 24 ページ）では、「振興会議は次に掲げる事項について検討し、その結果を市長に提案する」となっているので、会長の意見は少し違うのではないか。振興会議は観光振興ビジョンについて提案し、栗東市がその内容を全て採用するかどうかは別として、市で取りまとめてパブリックコメントに出す。その時は、実際は振興会議から離れたビジョンだと思う。意見や提案が採用されるかどうかについても「ビジョンの進行政管理に関すること」という役割があるので、意見を言う立場にはあると思っている。ただ、そ

の意見が栗東市でひっくり返ったとしても致し方ないし、パブリックコメントによってひっくり返る可能性もあると思う。

あまりガチガチに考える必要はなく、私にとってこの振興会議は自由に意見を言うことができる場所であればいい。それを採用するかしないかは市で考えてもらったらいと思う。

会長：私が言いたいことも同様で、振興会議で考えたものと栗東市が発表するものが「ビジョン」という同じ名前なので、我々の主体性が事実上、削がれているということを言いたい。例えば、振興会議でつくるものを「振興ビジョンへの提案」などの別名称にするのであれば理解できる。

委員の皆さんには分かりにくいと思うので、その理由と経緯を説明したい。第一期ビジョン策定の際、会議でかなり活発な議論をして、「こうあったらいい」「こうありたい」という具体的な話をした。しかしパブリックコメントなどを経て、市の発表文書になり、さらに重点事業などにブレイクダウンされていく過程において、細かい指標群になってしまった。結局我々が示したビジョンがどこかに消えてしまった。我々としては、「こうなってほしい、こうありたい」ということを文言化し、それを市に委ねたいと申し上げている次第だ。あえてイレギュラーな進め方をしているが、皆さんご意見はないだろうか。

委員：会長の言うところは、この会議では総論だけを話せばいいということだと思う。先ほどの最終評価（案）の整合性が取れないという件も、第一期ビジョンの最終評価が会議では一言も言っていないロードマップや具体策の評価になってしまっているからだろう。改めて、観光振興ビジョンとして「こんなまちを目指しましょう」と思っていたことができたのかを評価し、それに基づいて第二期では、体験型という新しいコンテンツや具体的に動き始めたホースパークなども考慮したビジョンを会議で示す。その後を受けて、市の商工観光労政課は別でロードマップを作ってください、という筋道にしないと、個別事業まで会議で決めたようになって、「こんなことやってたっけ」という疑問につながってしまうのではないか。

ビジョンの中身については、「栗東」という言葉を変えたらどこでも使えるとは思えない。第一期ではかなり市民に視線を向けた記憶があるので、なぜこんなことになったのかという思いだ。最終評価（案）を見れば見るほど、こんなことで観光は前に進むのか、そこまでしてビジョンは必要なのかと思ってしまう。民間ではビジョンに関係なく独自ですごい取り組みを始めているところもある。そういう実例が束になったときに「栗東市ってこういうまちだったんだね」となるのではないか。私も商工観光労政課の協力を得て、工場見学と自然

環境のマッチングをやったりしたが、工場見学などは最終評価に一切入っていない。何か違うんじゃないのかな、極論言ったらビジョンはいるのか？という感覚だ。

会長：工場見学については、私も第一期作成の際に「産業観光」という言い方でかなり主張したが、結局細かいメニューに載らなかったのでもいつの間にか忘れ去られていた。第一期ビジョン策定の際も私が会長を務めたので、自分に対する批判も含めて「何をしないといけなかったのか」をしっかりと確認した上で進めないと、細かいことに引きずられることになってしまうと感じている。

ここまでは前提条件の話をしてきたが、やはりビジョンの骨格部分について議論したい。今、素案の原案（資料3）を用意いただいている、すばらしい文章になっていると思う。この中の骨格部分にスポットライトを当てて、我々としては「このようなまちになってほしい」ということを言語化して、行政に委ねたいと思う。

それでは、資料3、ビジョン素案の骨格部分について、ここはもう少し強化する書き方がいいとか、これは要らないとか、そういう目線で確認いただきたい。スケジュール的には、次回2月に開催予定の第4回会議で、我々としてのビジョンを固めたいので、今日は素案を見て思うところを出していただきたい。

会長：まずは、私が事務局と素案の検討を行った際、21ページ「5年後の想定数値」について着地できなかったもので、皆様のご意見を伺いたい。

5年後の想定数値として、（1）観光入込客数131万人、（2）観光消費額46億円が掲げられているが、私はこれらは不要だと考えている。まず私が不要だと考える理由を述べ、その後で事務局から必要である理由を説明いただこうと思う。

まず私の理由だが、一言で言うと栗東市らしさに欠けるからだ。市の観光入込客数の実績は103万人だが、道の駅など通過型の観光客がその中心だ。道の駅は国土交通省の管轄なので、買い物した人は観光客として数えるという習わしがあるからだが、これが商業施設の場合は通商産業省の管轄になるので、入込客数としてカウントされないことになっている。つまり103万という数字は、観光客数として実態を表していない。何より、第一期の際も数を追うような観光ビジョンを出していない。市民の方々が地元への愛着や誇りを高めるということをビジョンとして掲げたが、いつの間にか外から何人来たかを数えるという、どこにでもあるような観光効果の指標になってしまい、実態に合っていないと思う。

消費額については、栗東市全体の生産額からすると微々たるもの。29億から5

年後に 46 億というのは誤差の範囲であって、金額の増減を議論すること自体が大切なことから目をそらしてしまうことになると思う。大切なことは、栗東市の皆さんが地域に対する愛着を高め、地域をより詳しく知ろうという気持ちになり、地元がいいところがあると知り、人生を豊かにしてもらおう。これが栗東市らしい観光ではないかと思うので、想定数値を出すことの無意味性を強調したいと思う。これが私の意見だ。客観的に考えていただくためにも、事務局からは想定数値が必要な理由を説明いただきたい。

事務局：想定数値として掲げている入込客数と消費額について、第一期ビジョンをつくる最初のきっかけは、栗東市を来訪する観光客数が少ないことにあった。入込客数が少なく、それに伴って消費額も少ないため、地域の事業者の方に落ちるお金も少ない。それを増やしていくためにも、観光振興ビジョンを活用して地域経済を豊かにしていこう、地域の事業所さんにお金が回るような仕組みを作っていこうというところから始まっていると聞いている。それを踏まえると、入込客数や顧客消費額という指標は継続して必要だと考えている。

委員：市として数字は必要だと思う。しかしビジョンとして「これをしなさい」とは言いにくいのと、消費額の 29 億が 46 億になったとしても栗東市の商業の生産金額にとっては非常に小さいと考えると、本当に経済効果があるのだろうか。ビジョンを作って観光が発展するかというと、今の観光は何か突拍子もないところからポンと出てきて、それが盛り上がっていくものではないか。コロナも誰も想定していなかったし、ニーズにいち早く敏感に動いた方がやっていたけるもので、観光は予測できるものではなくなってきたという点も含めると、数字って本当に必要だろうか。人数を何人にしよう、拠点をこれだけ増やそうではなく「栗東市の魅力を他の地域の方に知ってもらうにはどうしたらいいか」ぐらいのビジョンでもいいのではという気持ちになりつつある。

委員：我々観光協会の活動としては、栗東の魅力を内外に発信して、結果的にはお金を落としてもらって、商売している方々に波及していくような仕組み作りがあると思う。だから今日の議論でも、この振興会議の思いと市役所側の思いがあって、最終的には市が判断することになるとして、我々としては大枠の中で提案をしてはどうか。栗東市の魅力を発信できるようなまちづくりについて、この振興会議の中で議論できればいいのかなと思う。

委員：入込客数の多くが道の駅ということで、これが本当の観光なのだろうかと感じるので、想定数値は必要ないのではないか。一般の方には数字だけで判断され

そんな気がする。もっと根本的なこと、栗東独自の観光について考えないといけないのではないかと。魅力ある栗東にするためには、もっとアピールしていかないといけないのではないかと。

委員：当初、第一期策定の際に我々から意見していたのは、多くの人々が来るよりも、来た人が濃厚な観光をしてくれることで1人あたりの消費単価が上がるような観光の方が栗東らしいよねということ。それを振り返るとやはりこの想定数値は我々の思いとずれているので、掲載するかどうかはお任せするが、何か違うなど感じる。

委員：私は皆さんと逆で想定数値は絶対に必要だと思う。なぜ観光を推進するかというと、稼ぐため。今後、人口減少が進み、労働人口も減っていく中で、いわゆる外需、観光で稼いでいかないと市が成り立っていかない。皆さんの生活にも影響がある。そういう意味でもこのような指標は必要だと思うし、指標に対して達成が難しい場合は方向性ややり方が間違っていると判断する一つの指針にもなる。どのような項目を掲げるかや数値が適正かどうかは議論が必要だと思うが、観光で稼ぐための何らかの数値目標、ビジョンに向かって進んでいるかどうかを確認できるような指標は置くべきだと思う。

委員：補助金を引っ張ってくる上では想定数値のようなものは必要だと思う。何らかの数字効果を示さないと根拠がないので、補助金を申請できないのではないかと。栗東市として国や県から観光系の補助金や助成金引っ張ってくるには、経済効果がこれだけ発生するからこういう事業をする、だからこういう補助金をくださいという流れが必要だと思う。そういう現実的な話も市側がしないと、私たちからは言い出しにくい。ただ、ビジョンという考え方からするとちょっとずれてしまうので、ビジョンに基づいたロードマップのような具体案を別で作り、2本立てにすべきではないかと。

会長：ビジョンと実施計画のような2本立てというのが現実的じゃないかというお話だった。

委員：私は行政の立場なので、皆さんの意見を伺ってとても耳の痛い部分もあった。県でも「シガリズム観光振興ビジョン」という令和4年から令和12年までの9年間の計画を策定しているので、その例を紹介したい。県のビジョンでは、観光入込客数や消費額などの成果指標を採用し、3年ごとのアクションプランを作成している。入込客数や消費額だけではなく、県民の

方が県外の方に滋賀の観光をどれだけおすすめできるか、県内の事業者さんがどれだけシガリズムに取り組んでいただいているかという割合など、満足度的なアンケート指標のようなものも掲げて、アクションプランで成果を測るようにしている。

入込客数や消費額で観光の全てを正確に測れるのかというと、難しい部分もあるかと思うが、一方で行政としては、県民の方や議会から県への来訪者がどのくらいか、いくらお金が使われているのかということ聞かれるケースも多い。先ほどの話のように、国に補助金を申請する際は、目標値として何人呼んでくるのか設定をしなければならない場合もある。そのような点も踏まえて、行政としては、進んでいるのかいないのかを客観的に判断できるような何らかの目標を書いておきたいという考えがあると思う。

会長：実態を把握できるような指標を工夫する努力と余地があるという理解でいいだろうか。

ビジネス用語で「KPI (Key Performance Indicator)」（重要業績評価指標、重要達成度指標）というものがあって、定性的な目標を数値化するための工夫の一つだ。本来は言葉でしか説明できないような経営目標…例えば「みんなが元気だったらいね」のようなことを数値として図る方法を見つけ出して、指標化することが KPI だが、随時自分たちが使いやすいものに変えていけばいいので、そういった工夫も求められるという意見と理解した。

会長：皆さんにはめんどうな議論に付き合っているが、その理由を補足させてほしい。第一期ビジョンの際に一番重視した点として、一つ目は地域の誇り、二つ目が官と民の切り分けだ。民がやるべきこと、民が適切なことは民でやり、官は官にしかできないこと、例えば道路をつくるとか、規制を緩和するとか、そういうことを考えてほしいということ。三つ目は子どもたちに地元をどう見てもらうか、博物館とか教育委員会などとの連携が手がかりになるような観光のあり方が栗東市らしさではないかということを議論した。市役所の中で教育委員会にお願いすることはハードルが高いだろうと思うが、そこはあえて我々の立場から、教育委員会も巻き込んで地元の良いところを子どもたちに見てもらってくださいね、という「こうあってほしい」ことを言った。会長として、そこに一旦立ち返りたいという考えで今はやっているところだ。

ここまでが前段的な議論になってしまったが、皆さんにもう一度見ていただきたいのが2ページ「2. ビジョンの位置づけ」15～・16 ページの方向性、基本方針などについて確認いただき、齟齬がないか、このようなビジョンや将来像を我々は持っているということでもいいかを確認いただきたい。私としては大き

な齟齬はなく、言いたいことは基本的に変わってないと感じている。

委員：市民に…という部分について。ビジョンはたった5年間なので、いっそのことターゲット層をもっと絞り、市民の方々が栗東にしっかりと愛着を持てる5年間というくらいのことでもいいのではないか。

栗東市からの人の流出は、遠いところではなく草津や守山など周辺地域への流出が止まらない状況になっている。こういう時に、栗東の魅力を発信できるようにしていかないと、観光にのみ絞ってできることではないように思う。

第一期ビジョン策定の前に、いろいろな団体や各課の課長・部長まで交えて、横並びでちゃんと観光のことを考えましょうという話をした記憶がある。そこに立ち戻るべきじゃないのかと思う。観光を生業にしている方には大変失礼な言い方かもしれないが、市の経済効果として微々たるものであるなら、たとえ5年間足踏みしたとしてももっと斬新なことをやらないといけないんじゃないか。何が斬新かはわからないが、何かしないとどこのビジョンでも一緒だなという気がする。

会長：素案の骨格にあたる15・16ページ、17～19ページの基本戦略について大きな違和感があるかどうかということだけでも確認いただければありがたい。私としては、ここの項目立てや言葉づかいに関しては第1回・第2回会議でかなり率直に意見を交わして言葉を編み出したものであり、今日これまでの議論とさほど大きなずれはないように感じている。そのため、これをベースにしてこの会議体としての「栗東市さんにこうあってほしい」という考え方を明確にした文章に仕上げて、次回会議で提案をさせていただきたい。

委員：別の観点から。語句の説明がいないビジョンにしてほしい。カタカナ用語が多いので、日本語にしてほしい。例えば、シビックプライドなど日本語に置き換えられるものは置き換えるべき。

会長：ブランディングやプロモーションも。ユニバーサルはこれでいいとして…。

委員：広告戦略とかに置き換えられると思う。

事務局：シビックプライドは栗東市の上位計画に入っている言葉だったので統一的に採用した。

会長：第一期ビジョンでは市民の誇りや愛着という言い方をしていたが、上位計画で

シビックプライドという単語が使われるようになっているそうだ。

副会長：第一期策定時からこの会議に参加しているが、当時シティセールス戦略会議にも参加していて、やはり戦略と戦術は違うよねという点から入り、市民にどうアピールしていくかとか、幸福度のようなものとか、郷土愛を高めるっていうのにすごく力を入れたと思うが、その会議はなくなっているのか。

会長：なくなった。私が会長を務めたが、当時の会議で終了した。

補足すると、かつてシティセールス戦略会議というものがあって、当時の主な狙いは、市の全部局の課長クラスが集まり、外部者も若干関わって、市の中で部局間連携が起こるような環境づくりをするというものだった。それは一定の役割を果たしたということで終了している。あくまで市の庁内の活性化の話であって、シティセールスと言いつつセールスに関するその後の担い手はどこなのかっていうことは完全に曖昧になってしまった。この観光振興会議なのかというところのような気もするが、曖昧なままだ。

会長：では、先ほど私から提案したように、この素案については私自身ももう少し読み込んで、次回会議では「これで提案しよう」と合意いただけるようなものをお出したい。

想定数値については委員の方からご指摘や事例の紹介があった。栗東市として考えるべき指標の設定の仕方や管理方法について、何かお考えがあれば私か事務局宛にお寄せいただけるとありがたい。KEIBUNにも同様に、栗東市にふさわしい指標のあり方や他の指標との整合性のことも含めてご提案いただけるとありがたい。

委員：20 ページ「3. ビジョンの体系」の基本方針や取り組み例など、いずれもあったらいいと思うが、民間でできることが結構書いてある。民間の立場としては支援があれば大変助かるし、官民連携を考えてくれていることはとてもいいのだが、交通整備などは民間ではかなり難しいので、それを行政がやりますというくらいのことを書いてほしい。

自然のエリアや歴史文化で観光を振興すると書いているが、その地域で今、何より難しいのはハード面で、大変なところがたくさんある。また、山の施設では「やまのこ」という滋賀県の森林環境学習で小学四年生が未来館に来てくれている。子どもたちが自分たちの住む地域で自然教育を受けるということは、大人になったときのシビックプライドに繋がると思う。それなのに、教育委員会などからは「やまのこの宿泊をやめて来年から日帰りにする」ということで、

外に出る教育がどんどん縮小傾向にあって、素案に書いていることと自分が普段感じていることの矛盾を感じる。観光振興ビジョンというものは、商工観光労政課だけではなく他の課の理解や連携が必要だと思う。大きな観点で行政しかできないことを、ズバリ「この5年はこれをやります」ということを示してほしい。

会長：問題意識は私も全く同じだ。やってもらいたいことを明示する必要があると改めて感じた。今のような思いもあって、素案を作った際に、20ページの体系の中の、例えば基本方針1の基本戦略1の基本事業1で「限定プランや特別イベントの実施」となっていたところに「支援」を追加するといった修正をいくつか行った。道路整備や先ほどの教育委員会との連携など、市でなければならないことをもう少し明示する方向でまとめられたらと思う。

委員：素案11ページ、観光消費額は1人あたり観光消費単価×観光入込客数で算出しているが、この観光入込客数はおそらく延べ人数だと私は理解している。延べ人数だと、1人の方が施設Aと施設Bに行った場合は2人とカウントすることになると思う。一方、1人あたりの観光消費単価は1人の方が1日の観光でいくら使ったかという金額なので、それを延べ2人で掛けてしまうと、観光消費単価が少し大きくなってしまわないか。例えば、県では平均立ち寄り数1.3という数値で入込客数を割って実人数を推計しているが、その点はどうなのか。また、令和10年の目標値を立てるときに1人あたり単価がすごく小さくなったとしたら、ビジョンで目指そうとしている高付加価値化などとは逆に、少額でもいいからたくさん来てもらいたいという目標になってしまうのではないかという懸念を感じたが、どうだろうか。

事務局：この点、事務局でも何度か議論をした。第一期ビジョン策定前に行った最初のアンケート調査では、1人が何か所を訪問したかというデータを取っていなかったのので、平均立ち寄り数から実人数を推計することができない。そのため、当初から延べ人数を掛けて観光消費額を算出しており、今回も同様の算出方法を採用した。次回、もし異なる算出方法を採用すると時系列の比較ができなくなるため、現時点では経年比較ができるように対応している。ただ、これも改めていくことは可能だと思う。また、観光入込客数と観光消費額をそれぞれ日帰り客と宿泊客に分けることで、どちらの客数や消費単価を増やすのかを示すということも検討したが、最終的には、総合戦略でこの二つの指標（観光入込客数、観光消費額）が採用されていることに合わせて、ビジョンでも想定数値の項目として入れていこうということになった

会長：11 ページ（1）観光入込客数の見出しのところで「1 人の観光客が市内の複数の観光拠点を訪れたとして 1 人回と数えることになります」とあるので、数字が調整されてるものだと私は理解したが、今の委員の指摘は違うのではないかということだろうか。

事務局：記載が誤っていたので、「市内の複数の観光拠点を訪れた場合は、複数回カウントしている」に修正したい。

会長：となると、観光消費額も実際よりも大きくなっているということだろう。

事務局：あくまでも推計であり、どう算出をするかは調査方法や調査にかけられる費用などに関わるため、すべての推計が同じ方法で算出しているわけではない。他の自治体では、県の平均立ち寄り数を使って観光入込客数を実人数に割り戻しているところもあれば、我々と同様に入込客数をそのまま単価に掛けているところもある。

会長：ということは、やはりこの数字に振り回されたらだめだということだろう。

会長：1 点、事務局に市の立場として聞いておきたいことがある。栗東市には、住むことを目的に来ている方と、栗東市の工場などで働くことを目的に来ている方の、大きく二つのセクターの人たちの活動が市の経済を支えていると思う。市としては、そもそも観光産業がどのような規模になるのが適正だと考えているのか。市としてどういうバランスを考えているのかを調べておいていただきたい。骨格部分をちゃんと共有したうえでビジョンをつくっていかないと、非常にテクニカルな話の方に行ってしまうと、上滑りで抽象的なものになるような気がする。

委員：入込客数と消費額について、道の駅（アグリの郷栗東、こんぜの里りっとう）が実際どの程度を占めているのかを知りたい。それによって、商業という考え方を除いたときに本当の観光っていくら必要なのかという話にもなってくると思う。

会長：資料の詳細は直接、委員と事務局との間で確認してほしい。

会長：ある意味、我々は非常に難しいことをやっているということを改めて感じてい

る。今日は観光振興会議の役割や位置づけを確認するということから議論をスタートしたが、単に意見を言っておしまいではなく、栗東市らしい観光を具現化していったほしいという思いを何とか形にしていきたいと思っているので、引き続き議論に積極的にご参加いただければありがたい。

6. その他

とくになし

7. 閉会

(田中副会長によるあいさつ 省略)

以上